

歴史小説 *Valperga* における新しいヒロイン Beatrice

Beatrice: A New Heroine in the Historical Novel *Valperga*

Rina Suzuki

鈴木 里奈

要 旨

Valperga: or, The Life and Adventures of Castruccio, Prince of Lucca (1823) は Mary Shelley (1797-1851) が歴史を題材にした最初の小説である。この物語の中で Mary は傑出した 2 人のヒロインを創り出した。フィレンツェの女性指導者 Euthanasia と フェラーラの予言者 Beatrice である。タイトルにある Castruccio とは 14 世紀イタリアの实在の君主 Castruccio Castracani (1281-1328) であり、英国ではルネサンス期の政治思想家 Niccolò Machiavelli (1469-1527) による伝記を通してよく知られた人物であった。それに対し Euthanasia と Beatrice は架空の存在であり、*Valperga* とはこの 2 人を象徴する架空の城である。タイトルに見られる虚構と史実の並置はこの物語の特徴であり、それは同時にヒロインたちの重要性を示すものでもある。Mary の父 William Godwin (1756-1836) と夫 Percy Bysshe Shelley (1792-1822) はヒロインたちの存在をもって *Valperga* が彼女の前作 *Frankenstein* (1818) よりも優れた小説であると認めている。Godwin や Shelley に加え、後年の多くの批評者の関心を特に呼び起こしたのは Beatrice である。本稿ではヒロイン Beatrice に焦点を当て、このヒロインが歴史小説の新しい局面を切り開くための Mary の試みの産物であることを確認し、*Valperga* の歴史小説としての特異性とその価値について考察する。

キーワード：ゴシックロマンス、歴史小説、排他的西洋文化

I はじめに

Valperga は当時の歴史小説群の中で独特な地位を確立した。これを可能にしたのが Beatrice であった。*Blackwood's* の書評において John Gibson Lockhart は *Valperga* を “historical romance” と表現している¹。Beatrice の存在によって、Castruccio についての史実にロマンス、特にゴシックロマンスの要素が加わっているためである。歴史を題材とする物語の中で Beatrice を取り巻く環境は異質的と言えるほどゴシック小説の世界そのものである。*Valperga* の執筆が 1820 年代というゴシック小説流行の最盛期と重なり、またこの期間が Walter Scott (1771-1832) のウェイヴァリー小説を始めとする歴史小説群の隆盛期とも重なることから、Mary が物語にゴシックロマンスと歴史的記録の要素を取り入れたことは不自然ではない²。しかしながら、Mary のこの試みには流行の反映以上に重要な点を見出すことができる。Mary がゴシックロマンスと歴史小説の融合によって、男性の知的領域であるとみなされてきた歴史的文献の中に女性の物語を描き込んだことである。Stuart Curran は *Valperga* に「歴史物語の新しい様式」の確立を認めて以下のように述べている。

And, faced with the male-centered, dynastic universe in which Walter Scott characteristically conceptualized the past, Mary Shelley, also uniquely among contemporary novelists, revises that model drastically. (106-7)

ゴシックロマンスと歴史の融合は読者層の拡張にも有効であった。*Valperga* は「歴史という真面目な読み物」として「思想を発言する階級」の関心をひき、また「驚くべきロマンス」として女性を含む「新しい、より多様な読者層」の興味をそそいたのである (Smith 69)。

さらに重要な点は、*Valperga* において Mary が歴史小説のもつ政治社会への実質的働きかけという効果と、ゴシック小説のもつ効果とを組み合わせることにより、最終的に西洋社会の歴史の実態とそこに埋もれてきたあらゆる社会的弱者の存在を浮かび上がらせようとしたことである。迫害に苦悩する女性を描く感傷主義的ゴシック小説の様式を、社会の不正を告発する手段として意図的に利用しようとする流れは 18 世紀末に起こっていた。Mary の母、Mary Wollstonecraft (1759-97) の *Maria; or, The*

Wrongs of Woman (1798) はその先駆けと言える (Small 154)。そして Joseph W. Lew が指摘しているように、Mary Shelley の時代、歴史文学はヨーロッパをはじめ全世界の政治社会において重要な道具となっていた (168)。つまり作家たちが史実の記録の中で政治的イデオロギーを戦わせるようになったのである。*Valperga* において Mary はこのゴシックロマンスと歴史小説のもつそれぞれの効果を画期的に利用し、「思想を発言する階級」に属する者たちの目を意識しながら、自身の道徳的・政治的スタンスを打ち出している。そして Mary のこの実践は Beatrice の人生の中に集約されている。Beatrice の考察を通して、歴史の分野に挑戦した Mary の小説家としての新たな試みについて探っていきたい。

II “the jewel of the book” : Beatrice の人物形成

“the jewel of the book” という言葉は、類まれなヒロイン Beatrice を William Godwin が称賛して書き送った言葉である (*MWSL* 1:323)。同じく Percy Shelley がこのヒロインの特性について、Mary の完全な独創の産物であり、自分が読んだいかなる物語の中にも類を見ないものである (*PBSL* 2:353) と称賛している。

フェラーラの女予言者として登場する Beatrice は、そのめまぐるしい変転の人生のために最も読者の関心を集める人物である。他の登場人物よりも短い人生の中で、彼女は神の巫女、巡礼者、異端信仰者、そして狂女へと変化する。このことから Beatrice が一元論的に説明することのできない人物であることは容易に推測できる。ここで Beatrice の人物形成について、彼女の前景となる人物像と比較しながらまとめておくことにする。Pamela Clemit によると、Beatrice は「Dante の Beatrice、Percy の Beatrice Cenci、そして Frankenstein の被造物の融合」によって生まれた創造的ヒロインである (181)。

Valperga は Dante Alighieri (1265-1321) と彼の *Divina Commedia* (1307-21) への言及で始まる。Dante の想い人であり、24 歳で夭折した Beatrice Portinari (1266-90) は彼の叙事詩の中に「永遠の淑女」として蘇った女性である。この叙事詩の中で、Beatrice は地獄、煉獄と Dante の案内を務めた Virgil に代わり、Dante の天国への昇天を助ける導きの女性として描かれている。一方、*Valperga* の予言者 Beatrice は「苦しみ悩む人類を教え導くために地上に遣わされた」聖なる乙女 “Ancilla Dei”

(*Valperga* (以下Vとする) 129)³として登場する。カトリック信仰の中で育ち、説得力のある雄弁で人々に説教をする Beatrice は、導きの女性である Dante の Beatrice と重なる。

もう一人の Beatrice は美しき父親殺しとして知られる 16 世紀イタリアに生きた女性、Beatrice Cenci (1577-99) である。彼女は暴虐極まる父親を殺害し、その咎のために 22 歳で処刑された。この悲劇の女性は、彼女の運命からインスピレーションを受けた多くの芸術家、ロマン派詩人たちによって蘇った。Shelley が劇詩 *The Cenci* (1819) に Beatrice の悲劇を描いたのは、Mary が *Valperga* 執筆の綿密な下準備を進めている時であった。深い悲しみと憐憫を誘う Shelley の Beatrice が Guido Reni (1575-1642) の描いた Beatrice Cenci の肖像画の影響を受けていることは劇詩の序文で明らかにされている。そして Mary の創造した Beatrice が Shelley と Reni の描いた少女の運命を背負った女性であることが語り手によって最初に明らかにされる。

Castruccio gazed on her exquisite and almost divine beauty. Her deep black eyes, half concealed by their heavy lids, her curved lips, and face formed in a perfect oval, the rising colour that glowed in her cheeks which, though her complexion was pure and delicate, were tinged by the suns of Italy, formed a picture such as Guido has since imagined, when he painted a Virgin or an Ariadne, or which he copied from the life when he painted the unfortunate Beatrice/Cenci. (V 127)

Frankenstein の被造物は自分自身の創造主であり、また自分が受けた全ての不正義、憎悪、嘲りの生みの親である Victor Frankenstein に復讐する。暴君的創造主への復讐を遂げる被造物は、家父長制にとって不安をかきたてる怪物的存在として、父親殺しの Beatrice Cenci と重なる。それは *Valperga* の Beatrice にも共通する姿である。異端信仰の母親の娘であり、影響力を身につけた女予言者である Beatrice が、父権社会では決して許されない存在であることが物語の中で明らかにされていく。被造物と予言者 Beatrice を最も強く結びつけるものは、悪意ある創造主、すなわち彼らの不幸の創り主である神への痛烈な非難の感情である。「苦痛の劇場」(Clemmit 182) である世界を創造し、そこに自分を掘り込んだ神に対する Beatrice の憎悪の言葉は、自

分を Adam または Satan であると言う被造物が繰り返す「呪われた創造主」に対する呪詛、また *The Cenci* における自分や家族を救ってくれない神に対する Beatrice Cenci の怒りの言葉と重なる。

導きの聖女、悲劇の少女、怪物的反逆者の性を纏った *Valperga* のヒロイン Beatrice が一筋縄ではいかない複雑なアイデンティティの持ち主であることがわかる。しかし同時に Beatrice のキャラクター性の複雑さは作者の思想を包含する能力の大きさにもつながっていることは確かである。それはまた一方ではゴシックロマンスのヒロインとして、他方では歴史小説のヒロインとして、Mary Shelley の新しい試みに力を与えるものとなっている。この点に Beatrice を「物語の至宝」とする理由があるのではないかと思われる。以降、Beatrice について、ゴシックロマンスのヒロイン像と歴史の語り手としてのヒロイン像というそれぞれの観点から考察していくことにする。

III ゴシックロマンスのヒロイン Beatrice

Beatrice はゴシック小説の「迫害される女性」の系譜に属する人物である。Ann Radcliffe (1764-1823) や Matthew Lewis (1775-1818) のゴシック小説に登場する「迫害される女性」について Mario Praz は次のように述べている。

All these unhappy daughters of the ill-starred Clarissa (meaning Clarissa Harlowe in Richardson's well-known novel) suffered the same kind of outrages and terrors, languished in the depths of horrible prisons, and died or risked a violent death. (110-111)

Beatrice の人生を辿ると、彼女が「不運な Clarissa の不幸せな娘たち」の一人であることがよくわかる。フェラーラの予言者であった彼女は恋人 Castruccio に捨てられた後、後悔の巡礼者となってローマへと向かうが、その途中、謎の男にさらわれ、3年間もの間「地獄の館」(V 258) で監禁、虐待される。その後、彼女はパテリン教徒の老人に助けられ、自身も異教徒となる。しかし異端審問官によって牢獄に入れられてしまう。そして最後は狂気に陥り、衰弱して命を落とすのである。中世の迷信深い南欧カトリック圏という舞台設定から、挑戦的であるが犠牲者となるヒロイン像、ヒロ

インに対する暴力を可能にする館や牢獄といった閉鎖空間、暴君的な悪漢に至るまで、ゴシック小説に受け継がれている様々な様式が Beatrice と彼女を取り巻く環境にずばりと当てはまる。

Beatrice の人物形成には 1 つの明確な教訓が込められている。それは自己耽溺的で退行的なゴシック的想像力を非難する後期啓蒙運動の教訓である。Beatrice を予言や迷信が力をもつ世界と結びつける彼女の「並々ならぬ熱烈な想像力」の危険性を物語の語り手ははっきりと示している。

Poor Beatrice! She had inherited from her mother the most ardent imagination that ever animated a human soul. Its images were as vivid as reality, and were so overpowering, that they appeared to her, when she compared them to the calm sensations of others, as something/superhuman; and she followed that as a guide, which she ought to have bound with fetters, and to have curbed and crushed by every effort of reason. Unhappy prophetess! (V 152)

理性によらない奔放な想像力のために、Beatrice は彼女と Castruccio との愛人関係に神聖な靈感を見出す。Castruccio への愛に陶酔した彼女は額につけていた “Ancilla Dei” と掘られた銀板をはずし、自分の全てを彼に捧げると告げる。Beatrice の迷信への傾倒や恋愛に対する盲目は、啓蒙主義的教育の観点から見れば、女性の知的革命の必要性を示すものである。ここに Mary Wollstonecraft の社会思想が投影されていることは明らかである。特に Castruccio への Beatrice の熱情の描き方には「女性が陥った墮落状態」に関する Wollstonecraft の主張が読み取れる。

... if they [women] are moral beings, let them have a chance to become intelligent; and let love to man be only a part of that glowing flame of universal love, which, after encircling humanity, mounts in grateful incense to God. (160)⁴

Curran は Beatrice を「Wollstonecraft の遺産」であるとして以下のように指摘する。

... in Beatrice herself, we encounter, in a remarkably non-judgmental and psychologically penetrating form, the attribute that Mary Wollstonecraft had both principally inveighed against and tragically embodied, a passionate sensibility unsusceptible to rational control. As much as any of Wollstonecraft's polemics on the subject of what happens when women allow themselves to be identified solely by their emotions, Beatrice of Ferrara constitutes a powerful object lesson to young female readers, particularly in a culture that ... had become obsessed with the transports of female genius. (113-14)

同じヒロインであっても啓蒙教育の中で育てられた Euthanasia は感情と闘う源力、すなわち理性を持ち合わせており、Castruccio による裏切りにも耐えることができる。この源力を完全に欠いていた Beatrice はまさしく「ほとんど犠牲者になるべく生まれた存在」(O'Sullivan 140) である。異端者の娘として基本的に市民権を剥奪されている Beatrice と、啓蒙教育の中で育ち、経済的、政治的、道徳的独立がもたらす個人の自律性を享受している Euthanasia の社会的地位の相違が、2人を取り巻く城の違いに投影されていることは興味深い。Beatrice が監禁された館は「ゴシック的な城の囲い込みが女性に対する暴力を可能にする場所」(Smith 73) であり、夜ごと「悪魔のカーニバル」(V 257) が行われている地獄の城である。一方、Euthanasia が母親から相続した Valperga 城はそうした「ゴシック的囲い込み」とは正反対の機能を有しているのである。Valperga 城は政治的自由と啓蒙的美徳とを公言することのできる場所として開かれていた。

Beatrice が最もゴシック的ヒロインとなるのは、彼女が暴君に貶められ狂女となったときである。彼女の狂気には2つの側面がある。1つは暴君による絶え間ない迫害によって無力な女性が狂気に陥るという感傷主義的ゴシックの伝統に基づくものである。邪な欲望を抱いた悪漢に窮地に追い込まれ発狂するヒロインを18、9世紀のゴシック小説は多く創り出してきた。こうしたヒロインの迫害の背景には父権的専制の実態を透かし見ることができる。さらに Valperga においては、ヒロインを監禁・虐待するのがカトリック聖職者(“canon”)の Battista Tripalda であることから、ここに作者の「宗教的正統に対する批判」(Clemit 182) が含まれていることは明確である。

Beatrice の狂気は、Castruccio や Tripalda という政治的・宗教的権力をもつ暴君の世界、すなわち父権制社会が女性にとって「力と恐怖の異質的世界」(Duncan 13) であることを示している。

また Beatrice の狂気には規範を逸脱した女性に対するレッテルとしてのもう1つの側面もある。女性の救世主を騙る異端信仰者の娘であり、女予言者として影響力を身につけていた Beatrice はすでに父権社会の規範を大きく逸脱した存在であった。Beatrice の養父であるフェラーラの司祭 Marsilio は、彼女が「母親の魂が舞い降りてきたかのように」予言を行うようになり、「異教徒的」(V 136) な言葉を発するようになったと悔恨と侮蔑を込めて語っている。それに加え、Castruccio との恋愛関係から彼女は道徳的規範の逸脱者となる。Elaine Showalter はヴィクトリア朝において、社会的慣習の規範を外れた女性には狂気のレッテルが貼られたことを主張しているが、Beatrice はそうした女性たちを先行する存在である。社会的規範の逸脱と狂気の関係は、文化に内在する根深い恐怖、すなわち、「ジェンダー、階級、人種、健康、権力、正義の定義の揺らぎからくる恐怖」(Small 156) の顕在化を阻止しようとする排他的社会が生み出したものである。多くの点で逸脱者である Beatrice の狂気はそうした社会の働きの産物とみなすことができる。ゴシックロマンスのヒロインとしての Beatrice は物語の展開において一貫して理性によらない奔放な想像力の弊害を示す存在であり、同時に社会が何を逸脱とみなし忌避するかという規範を示し、その結果としてそもそもの権威的社会構造に疑問を投げかける存在である。

IV 歴史の語り手としてのヒロイン Beatrice

歴史上のヒロインという観点から Beatrice を考察すると、彼女の人物像には Beatrice Cenci を含む架空ではない存在が絡まっていることがわかる。それらの存在は Beatrice の周囲の人間たちを通して描かれている。Beatrice はその短い生涯の中で社会の周縁に位置づけられたあらゆる人々と関わりをもつ。つまりそれは社会的慣習によって与えられる安定的な定義を揺さぶる存在となる。これらの存在は、14世紀イタリアの都市国家にとってというよりも「19世紀イングランドの洗練された社会」にとってそぐわない者たちであるように意図的に描かれている (Hill-Miller 132)。これらの人物たちに関して、Beatrice との関係を含めて略述する。

Beatrice の母 Wilhelmina の原典は Muratori (1672-1750) の歴史書 (1751) の記述にある 13 世紀の存在の女性とされている⁵。Mary はこの Muratori の原書を忠実に小説に取り入れている。この女性について語るのは司祭 Marsilio である。

Have you [Castruccio] never heard of a heretic and most dangerous impostor, of the name of Wilhelmina of Bohemia? This woman appeared first in Italy in the year 1289. . . . Outwardly professing the Catholic religion, and conforming in the strictest manner to its rules, she secretly formed a sect, founded on the absurd and damnable belief, that she was the Holy Ghost incarnate upon earth for the salvation of the female sex. (V 130-131)

さらに続けて司祭はこの女性が自分をボヘミアの女王の娘であり、大天使 Raphael の受胎告知によって生まれた「女性のための聖霊の化身」(“the Holy Spirit in favour of the female sex”)であると騙たと説明する。ここで引用した Wilhelmina の説明は Mary が Muratori の歴史書からほぼ抜粋したものであるが、Barbara Jane O’Sullivan が指摘しているように、“for the salvation of the female sex”と“in favour of the female sex”という2つのフレーズは Mary がオリジナルで付け足したものである (144)。この変更によって Wilhelmina の異端性は宗教的正統と父権社会の両方に向けられたものとなる。司祭はこの女性とセクトを「秘めた害悪」(V 131)と糾弾する。

Beatrice を生んで二年後に亡くなった Wilhelmina の代わりに子どもを育てるのが女弟子の Magfreda である。Wilhelmina の教えを伝道によって信者たちに残していこうとする Magfreda は、教会と社会にとって最も危険な人物と言える。Magfreda は異端審問官に捕えられる前に Beatrice をミラノからコモにつながる深い森の中に住むらい病の男に預ける。

異端者やらい病の男が Beatrice の出自に関わりをもつ一方、彼女の死に関わるのは魔女 Mandragola である。この魔女はアペニン山脈を覆う森の洞窟に住み、Bindo という小さなアルビノを使って魔力を吹聴させている。しかし彼女が使う魔術はすべていかさまであり、読者には合理的な説明が示されるため、ゴシック・パロディ的な Mandragola の存在は Castruccio の生涯を描く歴史小説という枠組みの中でひと際滑

稽なものに思える。西洋文化の聖女のまさに対極に位置する魔女を名乗る彼女は、異端中の異端として物語の中世イタリアにおいても19世紀のイングランドにおいても憎悪と嘲笑の対象となる。

Beatriceの周りに配置されたこれらの人物を見れば、Maryが明らかに意図的に社会の周縁的存在を集めていることがわかる。それは彼女が「社会システムの犠牲者」と考える人々である。後年のジャーナルの中でMaryは自分が両親や夫のように急進的な革命思想を持ち合わせていないことを率直に認めながらも(MWSJ 2:553-5)、常に「社会システムの犠牲者となった人々を擁護し、援護してきた」(MWSJ 2:557)と綴っている。強力な社会の慣習の中で虐げられ、その主張を阻害されてきた人々を擁護することが小説家としてのMaryの一貫した指針であったとするならば、MaryはBeatriceと周囲の人物の一人一人の歴史を通して、排他的西洋文化の歴史の水面下に埋められてきた社会的弱者の歴史を再構築しようとしているのではないかと考えられる。

V 「社会システムの犠牲者」の歴史を辿る Beatrice

Beatriceの人生に関わる人々に投影される歴史的存在について考察する。「女性の救済」をうたうWilhelminaについて、LewはJoanna Southcottの投影を指摘する(163-4)⁶。そしてまたこの異端の女性にMary Wollstonecraftの投影があることは容易に推測できる。女性の権利を擁護したWollstonecraftは、Wilhelminaと同じように、一部の熱狂的な信奉者を得た。しかしながら、父権社会の絶対的な慣習を揺るがす彼女の主張は危険視され、時代はWollstonecraftに不道徳や退廃の烙印を押ししたのである。因習との対立によって「イングランドの洗練された社会」から追放されたWollstonecraft像が中世イタリアの実在の女性を意図的に脚色してMaryが創り出したWilhelminaに見いだせる。

Wilhelminaの女弟子であり伝道者であるMagfredaについては、伝道と宣教によって教義を広めてきたキリスト教の神聖な歴史を想起させるが故に、彼女に対する社会の恐怖と嫌悪は強烈である。この人物には中世からMaryの時代に至るまでの教会と女性の歴史が描き込まれている。Magfredaに纏わる歴史について特にLewは18世紀後半に起こった信仰復興運動を取り上げる。この復興運動から宗教は女性が活躍す

ることのできる公の場となった (163)。Margaret Maison によると、特にモラビア、ウェスレー教会による運動の中で、女性は「伝道師、演奏家、聖歌隊指揮者、協議会やコミュニティの組織者」として活動することができた (11-14)。しかしながら、こうした女性の多様な役割が教会にとって恒常的な葛藤を孕んでいたことは事実である。メソジスト運動の中で、「女性説教者は小範囲ではあるが重要な役割を果たしていた」が、「1820年代初期」に「ウェスレー・メソジスト教会は最終的に説教者としての女性の使用を却下していたことは明確であった」と D. Colin Dews が論じている。そして Lew の指摘通り、これは Mary が *Valperga* を執筆していた時期とちょうど重なるのである。「説教し、予言し、即興の讚美歌を歌い、“Donna Estatica”としての務めを完全に果たしていた」Beatrice (V 136) にも教会に属するこれらの女性たちの姿が重なる。判然とはしないながらも、Magfreda、Wilhelmina、そして Beatrice には、信仰復興運動を機に少しずつ表面化した宗教におけるジェンダーの問題に対する Mary の批判が込められているように思われる。

司祭は Magfreda について「異教徒、私がこれまで決して見たことのない怪物」(V 131) と語り、また彼女が信奉する Wilhelmina の教義について「怪物のような不信仰」(V 133) と表現する。この「怪物」という言葉は Mary にとって極めて象徴的な言葉である。*Frankenstein* の名のない被造物は「怪物」と呼ばれ社会から追放された。怪物という修辞はすでに裏切り、忘恩、反逆といった不道徳を意味するものとなっていたが (Baldick ch. 2)、この物語の中で Mary は、神への冒涇の産物であり社会の慣習を逸脱した存在である被造物を怪物と呼ぶのか、それとも慣習に迎合しないものを決して許さない排他的社会を怪物と呼ぶのかという疑問を投げかけた。またこの言葉はフランス革命論争以降、政治的思想のメタファーとして用いられるようになっていた⁷。司祭は Edmund Burke に倣った言い回して Magfreda を怪物と呼ぶ。司祭の「怪物」という言葉には父権社会と教会が掲げる既存のイデオロギーの脅威に向けた嫌悪と恐怖が込められていることがわかる。最終的に Magfreda は火刑に処される。フランス革命の掲げた理念が既存の秩序の権威を脅かしたために抑圧されなければならなかったように、あらゆる階級の権威に先立つ権威、すなわち父権社会の権威を脅かしたために Wilhelmina と Magfreda の教義は根絶され、彼女たちは排除されなければならなかったのである (Lew 169)。

司祭に引き取られ、養育された Beatrice は母親や Magfreda、そしてらい病の男について最後まで何も知らないまま生きる。司祭は自分が意図的にこれらの人物を Beatrice の過去から取り除いたことを Castruccio に告白する。

She [Beatrice] was educated in the Holy Catholic faith; and I hoped that, untainted by her mother's errors, she would lead an unblamed and peaceful life, unmarked and unknown; God has ordered it otherwise. (V 136)

Wilhelmina や Magfreda の存在は永遠に隠され、実質的に彼女たちの歴史は消滅させられる。この司祭の望みは社会全体の望みであると語られる。あらゆる疫病と同様に実態のない脅威である新しいイデオロギーはその伝染を防ぐために解体されなければならない。それは西洋文化が繰り返してきた歴史である。Beatrice を Wilhelmina や Magfreda から完全に切り離れた司祭の意図について O'Sullivan は以下のように論じる。

Breaking the link between Wilhelmina and Beatrice is thus more than a religious imperative; it is a political maneuver, aimed at undermining the development of a female subculture that threatens the social stability of the patriarchy. There is evidence of this in the collaboration of Castruccio and Marsilio, which is designed for their mutual political gain. (145)

さらに O'Sullivan は Wilhelmina や Magfreda の生涯の抹消に「女性の物語がいかに簡単に失われ、そしてその価値が削り取られるか」ということへの Mary の痛切な思いを読み取る。Beatrice と彼女を取り巻く人々を巡る様々なエピソードは、女性というくくりを越えて、異端信仰者や疫病患者を含む社会のあらゆる周縁的存在が創り出す副次文化の発展を衰退させようとする社会的パラダイムを表面化させ、その機能の是非を問う形に構成されているのである。

にせ魔女 Mandragola もまた Beatrice の生きる社会の辛辣な排他的傾向を強調する存在である。西欧において、中世から 18 世紀にかけて実在すると信じられ、迫害の歴史によって恐ろしいゴシック的テーマとして生まれ変わった魔女を Mary は社会シ

STEMの犠牲者の負の側面を表象する人物として描いた。阿部美春は魔女の名が示す有毒植物であり薬草でもあるマンドレークは、医学や神学という男性の知的伝統に対する女性の知を象徴するものであり、Mandragolaに周縁と異端の地位に追いやられてきた産婆や薬草を扱う女性たちの姿の投影を指摘する(119)。ヨーロッパのルネサンス期には、薬草を用いて病人を治療したり、産婆役を務めて中絶をしたりする村の癒し手であった女性たちは魔女狩りの標的になって処刑された歴史がある(Ringel 255)。そしてこの魔女狩りの伝統は中世以降も西洋文化において拡張し、多くの女性たちを巻き込んでいった。政治と宗教とが結びついた父権社会で魔女役を演じるMandragolaがこうした迫害の歴史を浮かび上がらせる存在であることは彼女の過去が物語っている。

Mandragolaの性質は「昔に受けた不正によって残忍性へと向けられ」、彼女の「優しい愛情はくじかれていた」。子どもたちから引き離され、「彼女は呪い、復讐するためだけに残された」(V 269)。彼女の性質が社会の不正によって歪められたことは彼女の名が象徴的に表している。「ユリの花」を意味する“Fior di Ligi”という彼女の名は、根に毒をもつ「マンドレークの花」という意味の“Fior di Mandragola”(V 272)に変わっている。社会の不正、ミソジニー、迫害に対する復讐を目論むMandragolaは、WilhelminaやMagfreda、Beatriceが社会に対して抱く恐怖や怒りが集約された人物であり、いわば彼女たちの負の側面である。そしてまたこの魔女は*Frankenstein*の被造物の別の姿でもある。手ひどく扱われた者が社会に牙をむくのは当然であるというShelleyの思想(*PBS Prose Works* 1:283)がMandragolaと被造物の悪意に共通する。魔女は社会への復讐の足がかりにBeatriceを利用しようとし、にせ魔術を用いて結果的に彼女を死に至らしめてしまう。この魔女もまた火刑に処される。Mandragolaの物語は、迫害が次の迫害をもたらし、悪意がさらなる悪意をもたらすという排他的社会システムの悪循環を非難するものである。

Beatriceを取り巻く環境が迫害の歴史に基づくものであることの帰結が彼女のパテリン教義への傾倒である。Tripaldaの館から逃げ出したBeatriceを助けたのは、「一族から追放された」異教徒で、「彼を破滅させる聖職者たちの怒りから自らを森の中に隠していた」(V 261)パテリンの老人であった。現世での贖いの可能性に自ら背を向けてしまったBeatriceの心境は不幸にも彼の教義と共鳴し合う。「ギリシアの賢人

のように賢く、恐れを知らず、独立していた」この老人は Beatrice にとって「最も優しく最も愛すべき」(V 262) 父親的存在となったが、異端者として責め苦の中で死んでしまう。パテリン教義の信条への確信は Beatrice が経験したあらゆる迫害がもたらした必然的結果と言える。

宇宙は2つの霊、善霊と悪霊によって支配されており、目に見える世界、すなわち物質的人間の世界を統治するのは悪霊であるとするのが Beatrice の奉ずるパテリン教義である。Beatrice がこの信念を通して語る世界は Shelley の詩の世界の強い影響を受けている。Shelley が現世を神話で着色するときには、彼の神話は、現世を光明(善)と暗黒(悪)の対立として説くマニ教の流れを汲む(ブレイルズフォード 195)。Shelley が革命詩の中にうたったこの観念を通して、Beatrice は思想と行動に伴うあらゆる因習に反抗しながら、人間の正説たる神、すなわち「悪の霊」に対する最も大胆な Shelley 的非難を打ち立てるのである (Nitchie 61)。

Then reflect upon domestic life, on the strife, hatred and uncharitableness, that, as sharp spears, pierce one's bosom at every turn; think of jealousy, midnight murders, envy, want of faith, calumny, ingratitude, cruelty, and all which man in his daily sport inflicts upon man . . . Oh! surely God's hand is the chastening hand of a father, that thus torments his children! His children? his eternal enemies! look, I am one! (V 243)

Beatrice の創造主への非難はそのままあらゆる因習の生みの親である父権社会そのものに向けられる。彼女が非難する神は Tripalda、Castruccio、養父である司祭によって示された政治的暴政と制度化されたキリスト教信仰とが結びついた父権社会の神だからである。そして Beatrice にとってその神は「勝ち誇った悪の霊」(V 244) である。Shelley の詩では、人間万象の支配権を握る2つの大霊のうち、今の時代を統治するのは暴君や戦争を創造する悪の霊であるが、それは将来必ず善の霊に敗北する運命にある。しかしながら Beatrice の「万物に対する呪詛」(V 245) において悪の霊はすでに絶対的なものである。

The Spirit of Evil chose a nation for his own; the Spirit of Good tried to redeem that nation from its gulph of vice and misery, and was cruelly destroyed by it; and now, as the masterpiece of the enemy, they are adored together; and he the beneficent, kind and suffering, is made the mediator to pull down curses upon us. (V 245)

この絶望的なヴィジョンは Beatrice にとって狂気と死への序曲となる。Clemit が指摘しているように、Mary はこの Beatrice の呪詛がすでに *Frankenstein* を冒瀆的であると非難していた批評家たちに再び強い反感を抱かせるであろうと予測していた(182)。 *Valperga* の出版後、彼女は Maria Gisborne に宛てて手紙を書いている。

Did the End of Beatrice surprise you . . . I am surprised that none of these Literary Gazettes are shocked. (*MWSL* 1: 374)

実際は *Blackwood's* の批評者 Lockhart だけが Beatrice の信条について遺憾を表している⁸。Mary は Beatrice が社会に衝撃を与える存在となることを期待していたのであろう。Mary にとって Beatrice は批判の対象としてでも社会の注目を集めるべき存在であったのだ。迫害された者の歴史を辿り、それを表面化させながら、嫌悪的となる Beatrice の「万物に対する呪詛」が排他的社会システムの産物であることを示すことが Mary の最終的な意図であったのではないだろうか。

VI まとめ

Beatrice が典型的なゴシック小説のヒロインであれば、Castruccio に捨てられ、Tripalda に貶められたときに、すでに命を落としているか、完全に正気を失ってしまっているところである。しかし、歴史小説のヒロインとして彼女は生きのび、狂気に陥りながらも自分の過去の出来事を語る。これは迫害されてきた者を擁護するための Mary の慣用手段である。 *Valperga* が「Castruccio の生涯と冒険」の物語であるにも拘らず、この小説の中で一人称の語り場面を与えられているのはヒロイン Beatrice と Euthanasia だけである。Lockhart が言うように、 *Valperga* は「中世イタリアの奸智にたけた残酷な暴君」がいかにして誕生し、どのような歴史を残したかを描く物語で

あるが、それが実は Mary による見せかけであることがわかる。3 巻からなる長い物語の本当に初期の段階で Castruccio がルッカの君主になることが示される。読者が期待する通り Castruccio はルッカの王子となるが、ヒロインと異なり彼の内面や心情が描写されることがないため、彼は心的葛藤や成長を全く伴わない名目だけの主人公となる。Castruccio の人生描写は「公的記録」(V 323) の範囲にとどまり、この物語を小説として成立させるのは Mary が「私的記録」(V 323) と呼ぶものである。それはフィレンツェの女性指導者として暴君 Castruccio と闘い敗北した Euthanasia と迫害の人生を生きた Beatrice の物語である。「作者がこれからは簡単に避けることのできる誤り」であり、「*Frankenstein* において以上に作者の能力をくすませてしまう」ものであるとして Lockhart が皮肉的に「巧妙な驚くべきロマンス」⁹ と切り捨てたこの「私的記録」を Mary は、社会のほんの一部の者たちを取り上げて記録してきた歴史、「小説が描いてきた暴君と闘いの勇敢な歴史」(Smith 72) に対する、新しい歴史物語として掲げたのである。

予言者、巡礼者、異端者そして狂女となり変っていく中で、社会の周縁に追いやられた人々の物語を浮かび上がらせる Beatrice は、英雄、暴君、排他的社会の勝者の記録を多くとどめてきた歴史小説に、その対極に位置する人々の記録、とりわけ女性の記録を加えるために Mary が創造した人物とみなすことができる。このヒロインの存在によって *Valperga* は確かに「ウェイヴァリー小説の作者への真っ向からの挑戦」となり、「歴史の再構成」の試みとなるのである (Curran 114)。Valperga 城と暴君 Castruccio の歴史が並置されている物語のタイトルがこの試みを表している。「自由と共和制」の象徴から Castruccio の犠牲者の避難所へ、そして闘争のための要塞から最後は廃墟となる Valperga 城は社会の中で変化を余儀なくされ、死んでゆくヒロインたちと迫害されてきた人々の歴史の象徴である。Castruccio と Valperga の拮抗する2つの歴史について Lew は以下のように指摘する。

While Castruccio's "life and adventures" make the novel's actions possible, the novel explores the ways in which women (and especially talented women) adapt themselves to and eventually disappear into the tapestry of male history. (164-5)

この「男性的歴史のタペストリーの中に消失する女性」のイメージは Beatrice と彼女を取り巻く者たちの結末を言い得ているように思われる。しかし歴史小説の新しい形としてこうした存在に光を当てたことに *Valperga* の特異性と価値を見出すことができる。現代において *Valperga* は Mary Shelley の小説の中では周縁に位置するものである。Mary 自身も *Frankenstein* と比べてこの小説が成功しなかったことを認めている (*MWSL* 2:144)。しかし史実や歴史的人物と同じように、後々の評価の可能性を *Valperga* は残しており、それを可能にするのはヒロイン Beatrice の存在ではないかと思われる。

Notes

- 1 *Blackwood's Edinburgh Magazine* 13 (March 1823), p. 284.
- 2 *Valperga* 執筆に際し、Mary が Scott の歴史小説を強く意識していたことは事実である。ジャーナルには 1815 年から 21 年にかけて彼女がウェイヴァリー小説を繰り返し読んでいたことが記されている。詳しい日付と小説の題名については Pamela Clemit, *The Godwinian Novel* p. 176 を参照。
- 3 Mary Shelley, *Valperga: or, The Life and Adventures of Castruccio, Prince of Lucca* (1823) ed. Nora Crook (London: Pickering, 1996) p. 129. 以下、本稿中の *Valperga* からの引用はすべてこの版に拠る。
- 4 Mary Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Woman* (1792) ed. Miriam Brody Kramnick (Harmondsworth: Penguin, 1975) p. 160.
- 5 Mary による脚注には、「Muratori の *Antichità Italiane* No. 60 を参照」(V 130) とある。Curran によると、この歴史上の Wilhelmina は 13 世紀末、Magfreda という女性と共にミラノに居住し、表面上は敬虔なカトリック信者であったが、秘密裏に異教のセクトを形成し、フェミニスト的主張を広めたという (111)。
- 6 Joanna Southcott (1750-1814) はもともとメソジスト派の女性であったが、自らを女性救世主であると名乗り、ロンドンで予言を行うようになった。64 歳の時に神によって受胎告知を受け、新たなメシアを身籠ったと宣言したが、出産することなく亡くなる。Southcottians と呼ばれた彼女の信者は一時期は 10 万人を超えたが、19 世紀末にはかなり減少していたと記録されている。

- 7 「自然の秩序」としての既存の社会制度を転覆させようとする獍猛なフランス革命を Edmund Burke は「怪物」と表現し、Godwin は Burke 的言説に特有の言い回しを模倣して Thomas Paine と共に君主制や貴族制といった封建的の制度こそが「怪物」であると反論を加えた。詳しくは Chris Baldick, *In Frankenstein's Shadow: Myth, Monstrosity, and Nineteenth-century Writing* Chapter 2 を参照。
- 8 Lockhart は次のように述べている。“It is impossible to read it without admiration of the eloquence with which it is written, or without sorrow, that any English lady should be capable of clothing such thoughts in such words . . . alas! what is here put into the mouth of a frantic girl, mad with love and misery, has been of late put forth so frequently, and in so many different forms, by the writers of that school, with which the gifted person has the misfortune to be associated, that we should only be trifling with our readers, if we hesitated to say that we do not believe any matter.” *Blackwood's Edinburgh Magazine* 13 (March 1823), p. 290.
- 9 *Blackwood's Edinburgh Magazine* 13 (March 1823), p. 284.

Works Cited

- Baldick, Chris. *In Frankenstein's Shadow: Myth, Monstrosity, and Nineteenth-century Writing*. New York: Clarendon, 1987.
- Bennet, Betty T., ed. *The Letters of Mary Wollstonecraft Shelley*. 3vols. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980-88.
- Clemit, Pamela. *The Godwinian Novel: The Rational Fictions of Godwin, Brockden Brown, Mary Shelley*. Oxford: Clarendon, 1993.
- Curran, Stuart. “Valperga.” *The Cambridge Companion to Mary Shelley*. Ed. Esther Schor. Cambridge: Cambridge UP, 2003. 103-15.
- Dews, D. Colin. “Ann Carr and the Female Revivalists of Leeds.” *Religion in the Lives of English Women, 1760-1930*. Ed. Gail Malmgreen. London: Croom Helm, 1986. 68-87.
- Duncan, Ian. *Modern Romance and Transformations of the Novel: The Gothic, Scott, Dickens*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Feldman, Paula R. and Scott-Kilvert, Diana, eds. *The Journals of Mary Shelley*. 2vols.

- Oxford: Oxford UP, 1987.
- Hill-Miller, Katherine C. “*My Hideous Progeny*”: *Mary Shelley, William Godwin, and the Father-Daughter Relationship*. Newark: U of Delaware P: 1995.
- O’Sullivan, Barbara Jane. “Beatrice in *Valperga*: A New Cassandra.” *The Other Mary Shelley: Beyond Frankenstein*. Eds. Audrey A. Fisch, Anne K. Mellor and Esther H. Schor. Oxford: Oxford UP. 1993. 140–58.
- Jones, Frederick L., ed. *The Letters of Percy Bysshe Shelley*. 2 vols. Oxford: Oxford UP, 1964.
- Lew, Joseph W. “God’s Sister: History and Ideology in *Valperga*.” *The Other Mary Shelley: Beyond Frankenstein*. Eds. Audrey A. Fisch, Anne K. Mellor and Esther H. Schor. Oxford: Oxford UP. 1993. 159–81.
- Maison, Margaret. “‘Thine, Only Thine!’ Women Hymn Writers in Britain, 1760–1835.” *Religion in the Lives of English Women, 1760–1930*. Ed. Gail Malmgreen. London: Croom Helm, 1986. 11–40.
- Praz, Mario. *The Romantic Agony*. Trans. Angus Davidson. London: Oxford UP, 1951.
- Ringel, Faye. “Witches and Witchcraft.” *The Handbook to Gothic Literature*. Ed. Marie Mulvey-Roberts. London: Macmillan, 1998. 254–6.
- Murray, E. B., ed. *The Prose Works of Percy Bysshe Shelley*, “On ‘Frankenstein; or the Modern Prometheus’” [1818]. Oxford: Oxford UP, 1993.
- Nitchie, Elizabeth. *Mary Shelley: Author of “Frankenstein.”* Connecticut: Greenwood, 1970.
- Shelley, Mary. *Valperga: or, The Life and Adventures of Castruccio, Prince of Lucca* (1823). Ed. Nora Crook. London: Pickering, 1996.
- Showalter, Elaine. *The Female Malady: Women, Madness, and English Culture, 1830–1980*. London: Virago, 1987.
- Small, Helen. “Madness.” *The Handbook to Gothic Literature*. Ed. Marie Mulvey-Roberts. London: Macmillan, 1998. 152–7.
- Smith, Johanna M. *Mary Shelley*. New York: Twayne, 1996.
- Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman* (1792). Ed. Miriam Brody Kramnick. Harmondsworth: Penguin, 1975.
- 阿部美春. 「メアリ・シェリーの『ヴァルパーガ』」『境界で読む英語文学 — ジェン

ダー・ナラティブ・人種・家族』現代英語文学研究会編、東京、開文社出版、2005.

ブレイルズフォード、ヘンリー・ノウエル、岡地嶺訳『フランス革命と英国の思想・文学』東京、中央大学出版部、1982.